

# 平成 26 年度第 4 回文系チャレンジ講座を実施しました

平成 26 年度第 4 回文系チャレンジ講座が、平成 26 年 10 月 15 日、「障がいのある人の福祉」をテーマとして、本学教育福祉科学部准教授の廣野俊輔先生によって行われました。

遠隔配信された大分<sup>おぎのだい</sup>雄城台・大分鶴崎・安心院<sup>あしむ</sup>・日田・大分商業・大分西・高田・臼杵の 8 校(197 名)と、来学した森・竹田の 2 高校(42 名)を合わせて、計 239 名の高校生が受講しました。

廣野先生は、授業に先立って「障がいをもっている人は、生活のどんなところに不便を感じているのでしょうか。生活の場面でどんな支援があると生活がしやすくなるのでしょうか。障がいがある人が実際に利用する道具や関係する映像を利用しながら、高校生の皆さんと一緒に考えましょう。」と、障がいのある人の福祉の世界に導いていただきました。

スライドの各ページにはすべて「～ですか？」という問いかけで構成されており、受講生は考えながら理解を深めていくことができるよう工夫されていました。

障がいの種類、原因など障がいの知識を確認した上で、「実際に障がいがあるとどのようなときに困るの？」という問いから①移動・交通、②コミュニケーション、③学校や仕事、④生活するための金銭、⑤介護、⑥余暇の 6 つの観点で障がい者の「困り」に寄り添うということについて考えました。受講生が障がい者を頭の中に思い描き、障がい者の立場にたって考えようとするようすが伝わってきます。

授業の後半、「困ることはどうやって解決すればいいの？」と問いかけました。この問いで受講生は、①制度、②設備や道具といったハード面の整備が不可欠であることを学びました。そして、③周囲の人の態度をどうすればよいかについて、受講生に問いかけました。受講生が障がいを持つ当事者となった瞬間でした。具体的に、我々が障がい者を支援する手立てとして、①困っていたら尋ねる、②いたづらをしたり、笑ったり、じろじろ見たりしない、③障がいがある人のことを正しく知る の 3 点をあげました。

終わりに障がい者が使用する白杖、音の出るピンポン玉、マス目の黒い線が手触りでわかるオセロゲームなどを使用して、障がいを体験することができました。このような体験が、頭の中にある障がいのイメージに終わらせるのではなく、障がい者の不自由さを身をもって理解する第一歩だとわかりました。

受講生に「ぜひ、大分大学で“障がい者に寄り添える人間”になるため一緒に学びましょう。」と、呼びかけ授業を終えました。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して良かった」(95%「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ)、「教員は真剣に取り組んでいた」(97%)、「授業内容はわかりやすかった」(95%)、「板書(スライド)は適切だった」(80%)、「受講生は授業に意欲的に取り組んだ」(94%)と高い評価結果がでました。遠隔配信については、「音声は良く聞こえた」(71%)、「映像はよく見えた」(79%)という結果がでました。受講生の具体的な声として、「障がいについての理解が深まった」「まず、知ることが大切。自ら情報を得るよう努力をしたい」「相手の立場になるということの意味を考えさせられた」「テーマ毎に考える時間があつた」「福祉に関わろうという気持ちを後押ししてくれた」など、多くの感想が寄せられました。

